

考察 1 木の本 3 号墳の横穴式石室構造とその位置づけ

はじめに

今回報告となった木の本 3 号墳からは、遺存状態は芳しくないとは言え河原石積の横穴式石室が確認され、木の本古墳群における初の埋葬施設の発掘調査となった。銅釧の副葬（註 1）や前庭部出土の土師器甕の形態から 7 世紀前半の築造と考えられ、5 世紀後半の古式群集墳として造営が開始される木の本古墳群中では、新しい段階の古墳である（註 2）。

本章は木の本 3 号墳の横穴式石室について、Ⅲ章の事実報告を補足し、系譜や分布・変遷についての検討を通じて歴史的な位置づけを試みるものである。

（1）木の本 3 号墳の横穴式石室構造

まず、調査によって明らかとなった横穴式石室の構造的特徴を列挙したうえで、個々の特徴について簡単な検討を加える。

横穴式石室の構造的特徴

①玄室の平面プランは概略小判形を呈する顕著な胴張りで、羨道はやや短小で直線的、玄室長と羨道長の比率はおよそ 2 : 1 である。

②側壁は砂岩・チャート等の荒川由来と考えられる河原石で構築され、互目の小口積を基調としていた可能性が高い（註 3）。側壁最大幅部分の基底石に大振りの河原石が縦に据え置かれる特徴的があり、類例としては熊谷市立野 4 号墳（註 4）がある。

③玄室と羨道の境界となる袖部は、やや大振りの河原石を積み重ねており、7 世紀代に一般的な板状石材を組み合わせた玄門構造にはならない。

④奥壁は既に抜き取られ不明だが、抜き取り痕は直線的で、弧を描く側壁との間には不明瞭ながら屈曲点をもつ。従って結晶片岩等の板石を縦に設置し奥壁としていた可能性が考えられる。しかし抜き取り痕底面の状況からは大形石材とは考えられず、小ぶりな板石

を 1 ないし 2 段積んでいたと推定される。

⑤天井石については全く不明であるが、石室部分の攪乱土中には結晶片岩が含まれていたため、奥壁と同様にその板石を使用していた可能性は高い。

⑥玄室の床面構造は、旧表土由来の黒褐色土直上に裏込めと同質の砂礫を含むローム土を敷いて整地、その上に角閃石安山岩の拳大の転石を主体に、砂岩やチャートの小振りの河原石を交えた礫を敷く礫床である。羨道には玄室のような礫床は無く、玄室礫床下の整地土と同質の土床となる。なお、玄室と羨道の境は河原石を 2 段積んだ梱石で、羨道から一段下がって玄室へ至る構造である。閉塞施設の遺存状態も芳しくないが、いくつかの河原石が石室主軸と同じ方向で残されており、梱石を生かして河原石を小口積して羨道内を充填する構造であったらしい。

⑦石室の構築面は、旧地表の側壁ライン外側を浅く掘り窪め、外に向かうにつれて浅くなるように削り込んだ状態である。つまり石室部分が島状に掘り残された特異な構造で、この高まりに沿って基底石を直に並べていることから、この造作は石室の平面形態を決定する意味と、基底石を安定した地盤に据える為の配慮と考えられ、いわゆる堀形ではない。

なお、石室と墳丘の位置関係は、奥壁背後が墳丘中央に相当し、北武蔵の小円墳の設計方法としては古相の「奥壁中心型」（永井 2005b）である。

⑧側壁の控えは砂利で裏込めされており、使用量は少なく、控え積みと呼ばれるような裏込めを被覆する石積も存在していない。砂利はいわゆる腐れ礫を含まない未風化なもので、側壁石材と同様に荒川河川敷から採集され搬入されたと推定される。熊谷市三ヶ尻林 5 号墳（小久保ほか 1983）では、周堀内の一部を深堀して裏込めの砂利を礫層から採集しているが、本墳の場合は地山の礫層まで深い為、裏込め材も搬入せざるを得なかったと推定される。

⑨羨門の外には掘り割り状を呈する土壁の前庭部が設けられ、その底面は石室から離れるに従いレベルの

下がる緩いスロープ状をなし、前端には荒川水系主体の河原石（角閃石も僅か含む）で葺石状の石積が施され、その下端がテラス面となる。なお、周堀は石室前方右で途切れ、陸橋状となっている。

個々の構造的特徴の検討

次に上記9点について簡単に検討する。①～④に挙げた平面が小判形の胴張りプランで河原石積といった特徴は本墳石室の基本的な構成要素となる。

類例として、市域では荒川右岸の著名な群集墳である鹿島古墳群（塩野ほか1972・村松2004・2005）、熊谷市域では本古墳から距離的には近い荒川左岸の籠原裏古墳群（松田2005）、三ヶ尻古墳群（小久保ほか1983）、肥塚古墳群（松田2001）、鹿島同様に荒川以南の例であるが和田吉野川右岸の江南台地上に位置する上前原古墳群（森田2006）、さらに南方の江南台地内の和田川左岸に位置する立野古墳群（新井・森田2005）、荒川左岸のやや上流に位置する寄居町樋ノ下古墳群（岩田ほか1994）等多くの事例が確認され、概ね荒川の中流域（荒川扇状地）に特徴的である点からは**荒川扇状地タイプ**とすべき石室である。

ちなみに、角閃石安山岩の加工石材を使用するという点で根本的に異なるが、本墳北方の妻沼低地に位置する深谷市上増田9号墳（古池ほか1991）、櫛引台地上の北西寄りに位置する熊野古墳群中の平塚古墳（黒沢1962）、四十塚6号墳（鳥羽ほか2003）も小判形胴張りプランである。石材とその使用方法における特徴は上野地域（利根川流域）と同じだが、荒川扇状地と共通する点も多い。互いの影響関係を考慮しなければなるまい。

③の袖部については、荒川扇状地や外秩父山地に接する藤岡児玉地域等の、結晶片岩の多い地域で一般的な玄門構造でない点は注目される。特に荒川扇状地では緑泥片岩（結晶片岩の一種）と呼ばれる石材が多く石室に使用され、荒川の水運によって遠方まで供給されている（田中1989）。本墳石室が結晶片岩の玄門でない理由は、荒川流路から西に大きく外れたその位置に起因する為とも推定され、本墳で確認された結晶片岩が全て鈍銀色の脆いものであった点は、荒川経由で

の良質な緑泥片岩の供給を受けられなかった事を暗示するかのようである。

⑥の床面構造では、特に礫床に使用される石材が問題であろう。拳大の転石であるとは言え、利根川系の石材である角閃石安山岩を主体的に使用する点である。角閃石安山岩の転石を選択的に床面礫床に用いる古墳としては、利根川の本流に近い行田市の酒巻1号墳（埼玉県1982）と同21号墳（門脇ほか1994）があり、前者は側壁が角閃石安山岩の加工石材を積んだ利根川流域のタイプであるが、後者は河原石を積んだ荒川扇状地の系統で、本墳に類似する。

対岸の上野地域でも同様の事例は多く存在するが、全て側壁が角閃石安山岩の加工石材を積む石室で、上野地域の西半を中心とした利根川中流域に広く分布する特徴（尾崎1966・若松1982・右島1993）から、**利根川流域タイプ**というべき石室である。これを踏まえれば、本墳の石室床面に角閃石安山岩が選択的に用いられた背景は、やはり利根川流域との関わりを考慮する必要がある。とは言えこの角閃石安山岩の転石は、供給源である榛名山二ッ岳形成期の噴火以降（註5）の利根川河川敷には普通に存在する石材であったので（秋池2000）、むしろ古墳築造者が利根川の河川敷において、石材を選択採集できる社会情勢であったと評価すべきなのかも知れない。

⑦の石室構築面の状態は特徴的であるが、如何せん部分調査の為に不確定な部分が多い。石室部分が島状となる下部構造という点で類似する例に、角閃石安山岩を使用した利根川流域タイプの石室である本庄市小島の御手長山古墳（長谷川ほか1978）や、同市の御堂坂2号墳（増田1990）等がある。しかしこれら二例は盛土によって島状の高まりを作り出すものであり、削り出しによる本墳の例とは異なる。また、利根川対岸の利根川流域タイプの伊勢崎市醒1号墳では、石室内側部分がかなり高い島状に掘り残される特異な構造が確認されており（註6）、石室部分を掘り残す意図という点での共通点は見出せる。以上の事例からは、石室部分を島状に造作する下部構造は、利根川流域タイプに多いのかも知れない。石材の種類を越えた平面プランの共通性や床面石材の問題も含め、本墳の石室が

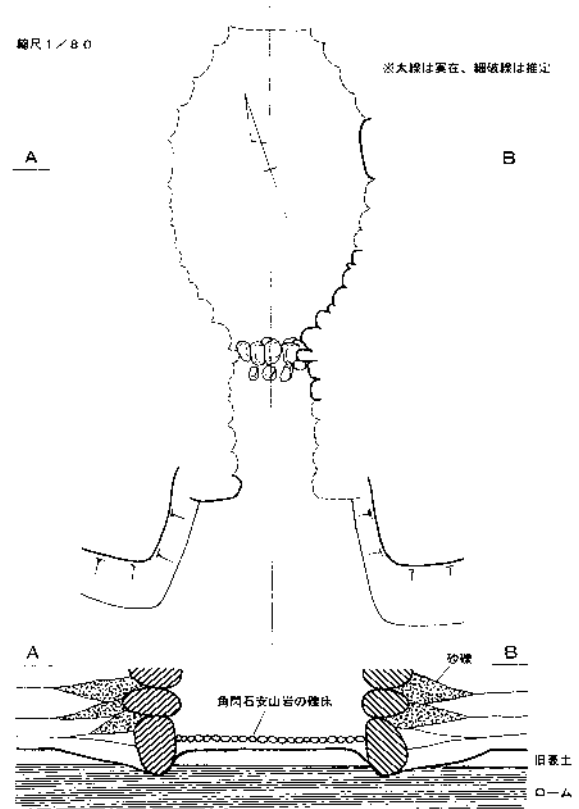
利根川流域タイプから一定の影響を受けている証左の一つとなろう。

⑧の石室裏込めの問題も示唆的である。荒川中流域の横穴式石室は、一般に地質的条件も相まって砂礫を裏込めに使用している。また、裏込めの砂礫を被覆する控え積みと呼ばれる石積みも多く、これについては児玉・藤岡地域の模様積石室に一般的である事から(永井2005aなど)、その影響とみて間違いないだろう。なお模様積石室では、裏込めが時期を経るに従って控え積みを欠き、砂礫の使用量も少なくなる傾向があり(永井2005bなど)、裏込めの薄い本古墳の石室は一見新しい様相とも思える。しかし鹿島古墳群では、埴輪を伴い調査古墳中で最も古いと目される1号墳で石室裏込めが薄く控え積みが無かったり、反面後出する24号墳に明確な控え積みが存在していたりする。つまり荒川扇状地タイプの石室では、裏込めを重厚かつ控え積みを伴う藤岡児玉タイプ(模様積石室)の影響が強い系統と、裏込めが薄く控え積みを欠く系統の2系統が存在する事になり、本墳の石室は後者に該当する。

⑨は特に前庭部壁に石積みを伴わない点に注意される。後期後半に至り横穴式石室前の儀礼行為が重要視されていく傾向を考慮すれば、前庭部壁が石積みを伴わない簡素な構造である点は、未発達な段階にあるという解釈もあり得る。しかし本墳より明らかに先行する三ヶ尻古墳群の林4号墳(やねや塚古墳・6世紀末、小久保ほか1983)では定型化した石積みの前庭部を伴っているので、本墳の場合は荒川から遠いという地理的条件や階層に帰する問題と考えられる。なお、やねや塚古墳は荒川に近く、多量の河原石による葺石を備えている。

なお、荒川との距離等、立地的には本墳と類似する籠原裏古墳群は、出土遺物からは確実に本墳に後出する事例であるが、ほぼ全ての古墳で石積みによる前庭部を備えている。これについては先に指摘したように、儀礼行為が重要視されていく中で前庭部の必要性が高まった結果と評価できるだろう。

前庭部前面の葺石状の石積みについては、周辺地域では類例を聞かないものなので、単に閉塞石を掻き出した形跡とも考えられる。



第21図 木の本3号墳石室復元図(模式)

以上、木の本3号墳の横穴式石室について、各部の構造的特徴を雑把ながら検討し、事実記載を補足した。以上の検討を踏まえた上で復元される本墳の横穴式石室は、上掲の第21図に示す様な構造であったと推定される。

(2) 荒川扇状地タイプの横穴式石室

今回報告する木の本3号墳は、前節での検討からは一部に利根川流域の影響も認められたが、側壁の構築石材からは前節で提唱した荒川扇状地タイプに含まれるものである。

本節では荒川扇状地タイプの石室を広く取り上げ、形態分類にもとづいた変遷観を提示し、木の本3号墳の位置づけに替えたい。また、荒川扇状地タイプと他のタイプの分布圏についても触れ、石室構造に見える地域圏を素描してみたい。

荒川扇状地タイプの定義と分類

定義 ここで分析対象とする荒川扇状地タイプの横穴式石室とは、荒川の河原石を使用した横穴式石室を広く包括するものである（註7）。

極めて雑な定義である為、時期・地域等の要因によって様々な形態が存在している事は容易に予測されるところである。しかしこれは一つの作業仮説として、石材の種類毎に石室築造に携わる集団が存在する可能性を考えている為であり、石室形態と石材の相関性から、石室構築を含めた古墳築造者集団と、発注者である被葬者の関係を問題化し、地域史研究の一視点として俎上に上げる必要があるとの認識に立ったものである事を予め断っておく。

分類 本来ならば立面形態も含めて分類すべきだが、検討対象となる石室の多くが上半を欠損するケースである為、ひとまず平面形態による分類とし、奥壁や袖部の構造や裏込め・堀形の有無等から細分する。（分類については第22図を参照）

A類：無袖式で狭長な平面形態をメルクマールとする。 深谷市小前田古墳群9・10号墳、同市の黒田古墳群3・6・7・8・9・10・11号墳が相当する。

側壁は基本的に河原石を小口積みにするが、小前田古墳群では奥壁に接する基底に大形石材を使用する特徴があり、奥壁は残存する全てが大形の石材を2段以上積んだものである。裏込めは、記録化されている小前田古墳群の2基では、いわゆる控え積みと呼ばれる裏込めの砂礫を被覆する構造で、黒田古墳群も報告書の写真からは同様の裏込め構造と判断できる。構築面は、小前田古墳群では全て旧地表面の直上であり、黒田古墳群も石室の床面レベルからは旧地表面への構築と判断される。以上の点から、本類は、群集墳単位で側壁の構造に多少の差異はあるが、形態・構造・構築方法の似通った一群で、強い共通性をもっていると言えよう。

B類：片袖式で、むしろL字形石室と呼ぶべきものである。 深谷市黒田古墳群4号墳の一例のみで、右側壁に大型石材を使用する点からは、本類はA類をL字状に屈曲させたものとも理解される。

C類：袖部がかなり不明瞭で、両袖式と無袖式の間的なもので、玄室平面形がA類に比べて幅広で、弱い胴張りを呈する点をメルクマールとする。

深谷市では小前田古墳群内稲荷塚古墳、見目古墳群1号墳、塚原古墳群1・3号墳、熊谷市三ヶ尻古墳群のやねや塚古墳、石原・坪井古墳群の薬師堂古墳が相当する。

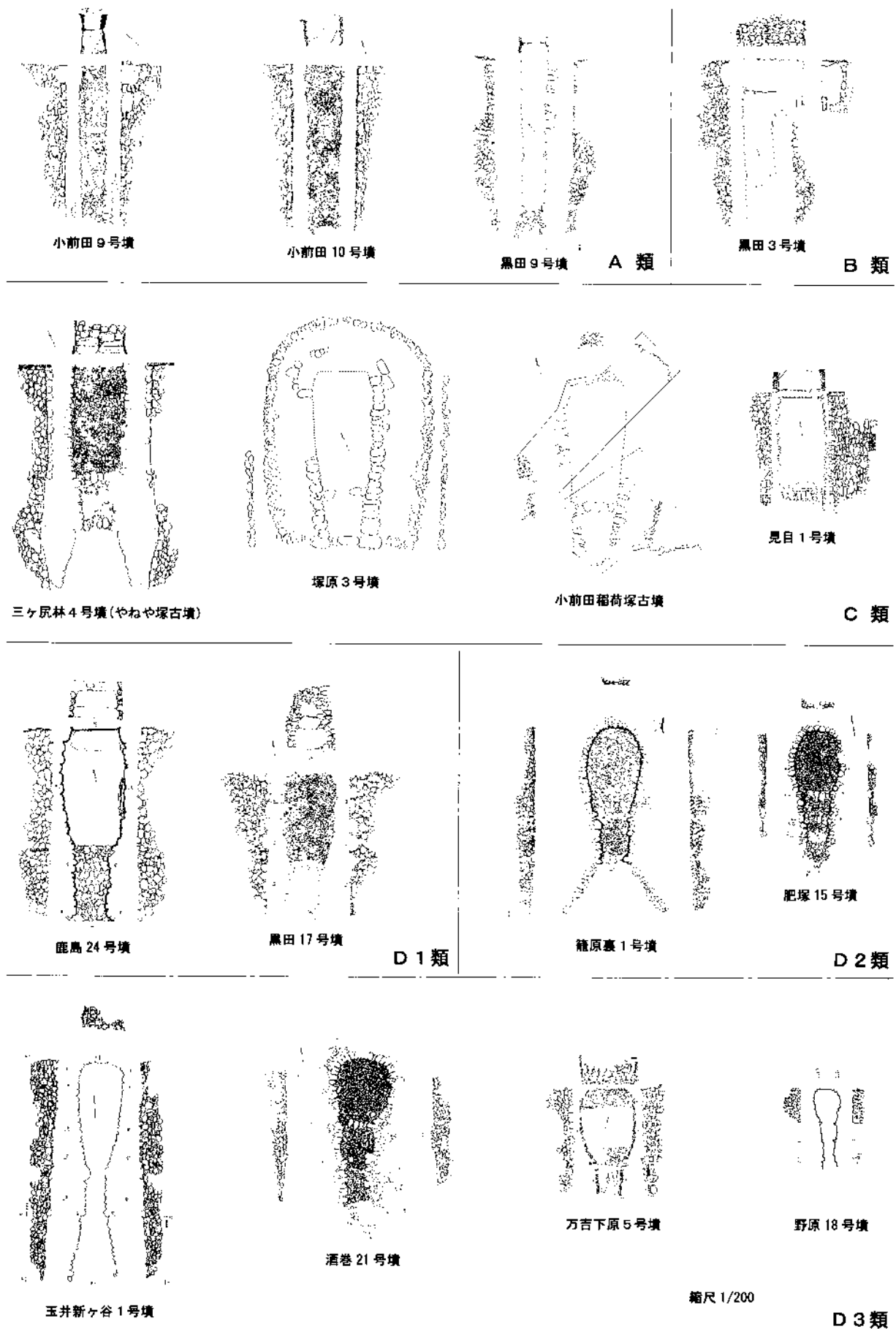
側壁は全体に大きさの揃った河原石を小口積みに、奥壁は側壁よりはる大振りの河原石を小口積みしたものが基本となるが、唯一見目1号墳がその玄室幅をカバーする緑泥片岩の1枚石である。袖部は基本的に平面的には不鮮明で、無袖とすべきA類に類似した状況であるが、薬師堂古墳では緑泥片岩の玄門が設置され、後述するD類に多い構造である。A類とD類の間的なものを含む特徴があるが、裏込めはその様相が明らかな事例の全てが控え積みを伴っており、築造面も旧地表面上で共通する。

D類：両袖式で単室、平面胴張りの玄室をメルクマールとし、玄室平面が徳利形で胴張りが弱く奥壁の明瞭なD1類と、小判形で胴張りが強く奥壁不鮮明なD2類、その他例外的な形態をD3類とする。

D1類としては寄居町樋ノ下古墳群6・15号墳、深谷市小前田古墳群1号墳（中小前田2遺跡）、黒田古墳群17号墳、見目古墳群2号墳、鹿島古墳群9・12・13・15・24・34号墳の計11例が確認できる。

側壁は河原石を小口積みにし、隙間には小礫が補助的に用いられ、模様積と言われる藤岡児玉タイプに類似する。奥壁には大形石材を数段積み、袖部は黒田17号墳では大振りの河原石をせり出させ、縦に目の通る構造だが、その他の事例では緑泥片岩の玄門がはめ込まれる構造である。裏込めは砂礫を使用し基本的に控え積み、構築面は判明する調査事例が少ないが、黒田17号墳では旧地表面上、樋ノ下古墳群6・15号墳では浅い堀形を伴っているが、不明な事例については石室床面レベルから大半が旧地表面上に構築されているものと判断できる。

D2類としては今回報告する木の本3号墳をはじめ、深谷市小前田古墳群3・4号墳、黒田古墳群20号墳、箱崎古墳群1・2号墳、鹿島1・5～8・11・16



第22図 荒川扇状地タイプの分類 (各報告より作成)

～23・25～27、熊谷市三ヶ尻古墳群林1号墳、籠原裏古墳群1～4・8号墳、広瀬古墳群熊商校内所在古墳、肥塚古墳群14・15号墳、野原古墳群17号墳、立野古墳群11・13・15号墳の計35例が確認され、D2類の主体をなすことは明白である。

側壁は河原石を小口積みに、奥壁は側壁と一体化する構造が基本であるが、鹿島古墳群では大振りな石材を鏡石的に設置する例が集中する。袖部は大半が緑泥片岩の玄門をはめ込む構造であるが、河原石を縦に目を通して積む構造も少数認められる。裏込めは砂礫を基本とするが全体にその使用量が少なく、籠原裏古墳群では直接墳丘の盛土が覆うような状態である。控え積みを伴う事例については、現状では確認できない。構築面は判明する調査事例が少ないが、浅い堀形を伴う事例が大半である。

D3類は上記D1類とD2類の双方に該当しないものであるが、注目すべき例が存在するので以下に紹介する。熊谷市の玉井古墳群中の新ヶ谷戸1号墳は、奥壁構造ではD2類に近いものの玄室の平面形態が小判形とならない狭長なもので、角閃石安山岩の加工石材を使用する利根川流域タイプに多いものである。同市の万吉下原古墳群5号墳も玄室の平面形態がやや特異なもので、これについては近傍の凝灰岩切石を使用する比企丘陵タイプの瀬戸山古墳群葉師寺1号墳が類似する平面形態である。行田市酒巻古墳群21号墳は奥壁構造からは完全なD2類であるが複室構造で、これについては同一古墳群中の酒巻1号墳が利根川流域タイプの複室構造で、やや下流に位置する同タイプの羽生市小松1号墳も複室構造なので、これらとの関係で理解される。熊谷市野原18号墳は玄室がD2類と判断されるものだが、前室が凝灰岩切石を使用したもので、比企丘陵タイプと半々という特異な特徴をもつ。

なお、以上のD3類とした例は、地理的には荒川扇状地の外縁ないしはその外に位置し、既に前段でも触れているが他タイプ石室との関係が強い。言い換えれば影響を受けたものと言えよう。

荒川扇状地タイプ各類の年代観

次に上記の都合5種類に対し、遺物等から時期の明

らかな事例を抽出し、各類の年代観を求めたい。

A類は全て埴輪を樹立する古墳なので、6世紀代である事は確実である。土器から時期の明らかな例としては、黒田3号墳と6号墳で石室内からMT15～TK10型式に比定される須恵器が出土しており、遅くとも6世紀第2四半期には築造されていたと考えられる。また小前田9号墳ではTK10型式模倣の土師器甕が4点羨道部から出土し、6世紀の中葉には築造されていた事を示している。以上からA類は、6世紀前半～中葉の時期が与えられる。

B類は黒田4号墳1例のみ、埴輪樹立古墳である。石室内から出土した無脚半球形の雲珠は6世紀前半にはほぼ限定されとの見解がある(坂本美夫1985)ので、B類はA類と同時期と考えられる。

C類は全て埴輪を樹立し、土器を出土した三ヶ尻やねや塚古墳では須恵器4点が前庭部付近から出土しており、型式学的検討によって6世紀第4四半期とされている(利根川1987)。他の古墳は出土遺物に細かい年代を示すものが乏しく不確定要素はあるが、逆説的に石室自体の形態も加味すれば、C類は6世紀後半から埴輪樹立の停止される7世紀初頭までの時期が与えられ、時期的にはA類に後続する。

D1類は黒田17号墳と小前田1号墳で埴輪が伴っており、その形態特徴から6世紀末の時期が与えられる(註8)。それ以外は埴輪を伴わず7世紀代以降の、時期を示す土器の出土が少なく、樋ノ下15号墳で7世紀第3四半期に比定される猿投産フラスコ瓶が出土している程度である。根拠は弱いものの、D1類は6世紀末～7世紀後半の時期を与えられるだろう。時期的にはC類と重複しつつ後続する。

D2類は鹿島1号墳が埴輪を伴い、D1類の黒田17号墳や小前田1号墳と同じ6世紀末の時期が与えられる。それ以外の埴輪を伴わない事例はD1類同様に7世紀に下るが、土器の出土が殆どなく、時期判定が困難である。ただ副葬品に蔵手刀(熊商校内古墳)や方頭大刀(籠原裏1号墳)をもつ例がある点や、全体に副葬品が僅少な例が主体となる点から、D2類はD1類と平行するが、副葬品からは本類の方がより新しい時期に主体を置くものと考えられる。

	500	550	600	650	700
A 類		—————	—		
B 類		-----			
C 類			-----		
D 1 類			—————	-----	
D 2 類			—————	—————	---
D 3 類		-----	—————	-----	---

第 7 表 荒川扇状地タイプ各級の消長関係

D 3 類は酒巻21号墳が埴輪を伴いMT85段階の須恵器が石室前から一括出土しており、6世紀第3四半期に位置づけられ（坂本1996）、胴張りプランとしては関東地方でも最古段階である。玉井新ヶ谷戸1号墳は前庭部付近から東海産の須恵器が出土しており、報告者は7世紀第1四半期としている。万吉下原5号墳は埴輪を伴わないが、前庭部から南比企産の須恵器が出土しており、その特徴から6世紀末頃の年代が与えられる。野原18号墳は時期を決定できる遺物の出土が無いが、複室構造という点から報告者は7世紀代でも遡ると考えており、ここでは7世紀前半の時期を与えない。

荒川扇状地タイプの変遷と系譜

次に先の検討で導かれた各タイプの年代観にもとづき、変遷と系譜について触れておきたい。

荒川扇状地タイプの横穴式石室は、今回A類とした無袖式で狭長な類型に始まり、当該地域における横穴式石室の事実上の導入期となる。またB類とした片袖式でL字状の類型も同時期に位置づけられるもので、北武蔵の群集墳における導入期の横穴式石室が、無袖式中心に片袖式を含むという傾向と一致する（増田逸郎1989など）。なお、A・B類の類例は神川町青柳古墳群等の児玉郡下の群集墳に多く認められ、上野西部における群集墳も同様の様相を呈しているの、北関東における普遍的現象の一環と考えられる。一方でC類は、時期に若干の断絶はあるものの平面形態はA類からの連続性が強い。石材の積み方や裏込めの控え積み、構築面に至るまでA類と一致する点は、C類がA類の定着と発展によって成立した事を示している。

続くD類は、胴張りプランが採用されるという点で一つの画期である。地域的には当該地域の外縁に位置

する酒巻21号墳が最古だが、例外的なものを便宜上一括したD 3 類であり、後のD 1 類・D 2 類の成立との間に時間的断絶も認められる事から、利根川流域タイプの範囲で捉えておきたい。

結論から言えば真の画期はD 1 類とD 2 類の成立する6世紀末で、その成立当初からD 1 類とD 2 類の二系統並存という特徴がある。これについては、D 1 類が平面形態や側壁と裏込めの控え積みから藤岡児玉タイプ（模様積石室）の影響下にある系統、D 2 類は特に奥壁の特徴から利根川流域タイプを志向した系統と理解できる。後述するがD 1 類は藤岡児玉地域に近い荒川の上流寄り、D 2 類は荒川と利根川の両水系の乱流地帯を中心に分布しており、これを補強する。ただし両類は、例えば鹿島古墳群等では混在し、奥壁構造に折衷的な様相（例えばD 2 類の平面形態だが奥壁に大形石材を使用する点）が多く見受けられ、同じ石材を使う系統として互いに深い関係性が存在していたものと推察される。

荒川扇状地タイプの分布

既に荒川扇状地タイプについて、個別の事例について取り上げ検討してきたが、ここでは改めてその分布に触れる。言い換えれば荒川の河原石を使用した横穴式石室が、地理的・地質的にどのような範囲に分布しているのかを示しておきたいと思う。

荒川扇状地タイプの定義は、本節の冒頭で述べたように、広義には単に荒川の河原石を使用するという要素のみである。つまり使用石材が荒川起源なのかという疑惑も生みかねない面がある。従って後追いはあるが、ここで北武蔵地域における他の石材を使用する石室タイプを列挙解説し、荒川流域タイプの自立性を確認しておきたい。

利根川流域タイプは既に度々触れてきたが、榛名山二ツ岳形成期の火山性噴出物である角閃石安山岩の転石を加工して側壁とするもので、利根川中流域の群馬・埼玉に分布し、一部は栃木南部・茨城西部に及ぶ。早くに尾崎喜左雄氏が着目し（尾崎1966）、右島和夫氏が再検討している（右島1993）。前方後円墳では五面削り加工で玄室が短冊状の直線胴、円墳では四面削りで玄室が隅丸短冊形の胴張りが多く、階層ごとに使い分ける指摘もされているが、他の石材タイプとの関係を窺わせる形態も多く、実情としてはかなりの多様性を内包していることが想像される。

藤岡児玉タイプは模様積石室とも呼ばれ、結晶片岩の棒状化した小転石と、大振りな河原石等をモザイク状に組み合わせて積んだ側壁を特徴とし、結晶片岩の分布と重複して藤岡市から児玉郡市にかけて分布している。早くに増田逸郎氏が注目して検討を重ね（増田1977a・1996）、志村哲氏（志村1998）や筆者（永井2005a）も再検討した。一部例外を除き三味線形の胴張りで、大半が相似の平面形態となる。また、前方後円墳では今のところ一例も確認できず、円墳の階層で普及したタイプと考えられる。

比企丘陵タイプは、凝灰岩の加工石材を使用するので、東松山市を中心に、南は川越市、東は行田市から桶川市・さいたま市まで、北は概ね熊谷市の南部まで広い分布を示す。早くから金井塚良一氏が注目し（金井塚1980）、最近では草野潤平氏によって再検討された（草野2008）。割石の一面を削った程度の石材を小口積みしたものと、ブロック状の石材を縦位に切組積みするものがあり、主体となるのは後者である。加工度合いの低い前者は、前方後円墳では方袖式で円墳は無袖式、後者は大半が複室の胴張りで、少数派だが単室両袖で胴張りの系統もある。

その他のタイプとしては、房総半島の石材を使用する埼玉將軍山古墳、角閃石安山岩・緑泥片岩・凝灰岩を使用した八幡山古墳、緑泥片岩のみで構築される小見真願寺古墳があるが、前方後円墳ないしは大型円墳といった首長墓の事例であり、石室自体も直接の対比は出来ない超越したものである。

第23図では荒川扇状地タイプの分布と、各タイプの

分布を示した。左下の概念図を見ると明白だが、荒川扇状地タイプの分布域はかつての荒川の流路と氾濫源（註9）をカバーしている。また、他3タイプの分布域と重複ないしは近接していることも判明し、系譜の検討で想定した各タイプからの影響関係について、地理的にも可能性が高い事を確認できる。

木の本3号墳の位置づけ

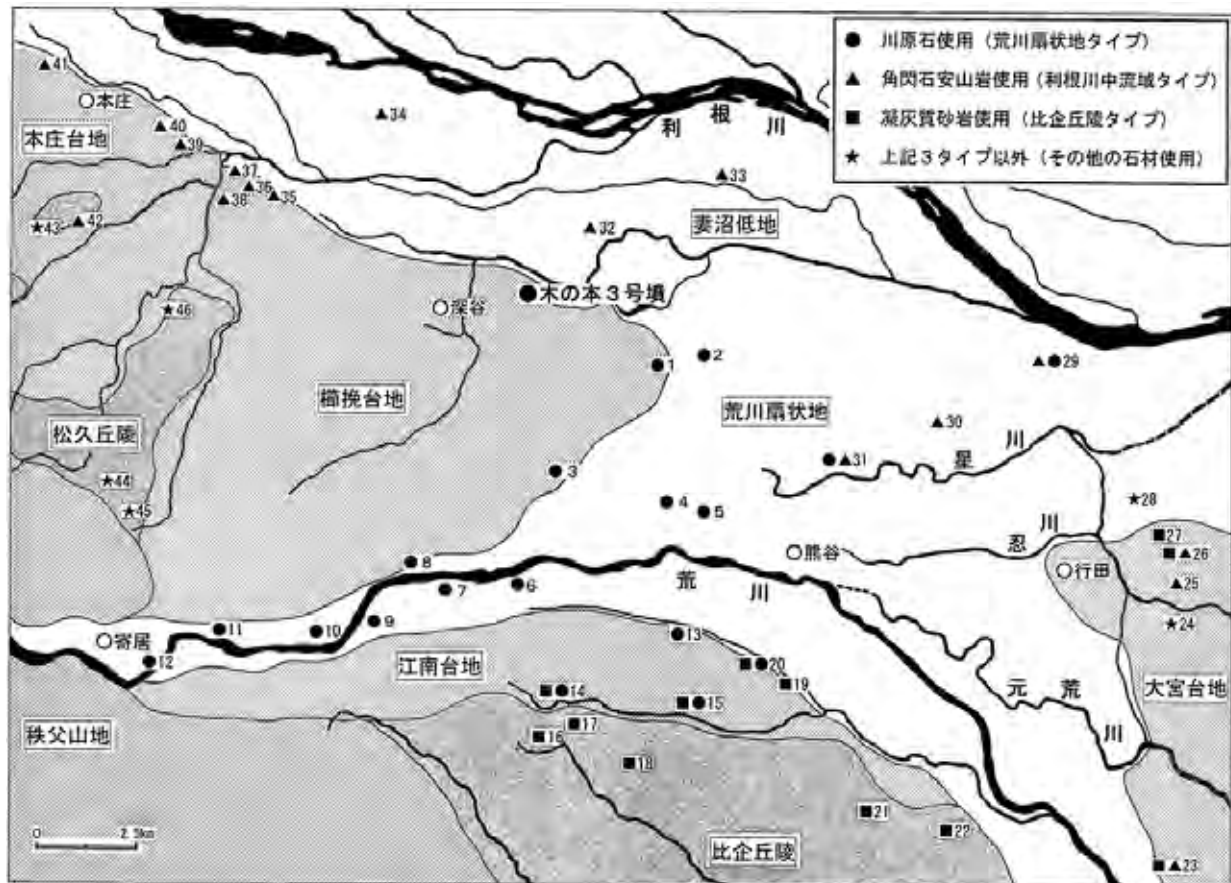
最後に、本章の目的である木の本3号墳の石室の位置づけについて、繰り返す部分もあるがこれまでの検討を踏まえて整理しておきたい。

木の本3号墳の石室は、特にその玄室の平面形態から、本節における分類のD2類に相当すると判断される。ただ、D2類において一般的な緑泥片岩による玄室を欠いている点は、あるいは先行するC類に近い様相とも理解できるので、D2類でも比較的古い段階の所作と考えたい。従って木の本3号墳の石室は、年代的には7世紀前半に位置づけられることは概ね異論の無いところであろう。

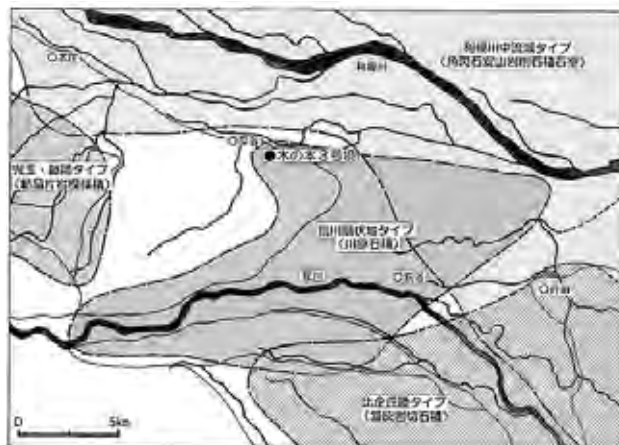
また、荒川扇状地タイプであるにも係わらず床面に角閃石安山岩の玉石を敷く点、石室構築面の状態からは、利根川流域タイプの間接的な影響を受けているものと判断される。第23図に示した各タイプの分布域や石材の運搬距離等の地理的条件を考えれば、むしろ木の本3号墳は利根川流域タイプであっても全く問題ないので、言を替えれば荒川扇状地タイプである必然性があったと考えられる。それは一重に、被葬者の社会的関係の象徴であるからに他ならず、やがて来る幡羅郡の設置という歴史上の画期を考えようとする時、今回の検討によって明らかとなった荒川扇状地タイプの分布域は、幡羅郡の郡域認定について考える際、重要な知見となろう。

おわりに

荒川扇状地タイプの設定と変遷・分布等を検討し、木の本3号墳石室について位置づけを試みた。いささか本題から離れて冗長となった感否めないが、横穴式石室から地域史を描こうとする際の、一つの通過点



関係古墳分布図



横穴式石室各タイプの分布範囲概念図

1 藤原系古墳群	24 埼玉系山古墳
2 玉井古墳群	25 白山古墳
3 ミツ尻古墳群	26 八幡山古墳
4 広瀬古墳群	27 地蔵塚古墳
5 石原・坪井古墳群	28 小見真観寺古墳
6 熊鷹古墳群	29 酒巻古墳群
7 塚原古墳群	30 中栗大塚古墳
8 見目古墳群	31 肥塚古墳群
9 箱崎古墳群	32 上増田古墳群
10 黒田古墳群	33 飯塚古墳群
11 小前田古墳群	34 下手計西浦古墳群
12 堀ノ下古墳群	35 熊野内山八幡塚古墳
13 上野原古墳群	36 千手堂御手長山古墳
14 立野古墳群	37 四十坂古墳群
15 野原古墳群	38 平塚古墳
16 古里古墳群	39 桑五十子古墳群
17 塩古墳群	40 御室坂古墳群
18 松原古墳群	41 御手長山古墳
19 瀬戸山古墳群	42 栗谷古墳
20 万吉下原古墳群	43 塚本山古墳群
21 三千塚古墳群	44 猪俣北古墳群
22 大境南古墳群	45 猪俣南古墳群
23 賀田古墳群	46 西山古墳群

関係古墳一覧 (番号は上図に対応)

第23図 荒川扇状地タイプの分布

であるとう理解頂きたい。

また、今回取り上げた荒川扇状地タイプのような、地域性の強い石室が認定できる背景には、当然石室の構築に特化した専門集団を想定すべきであろう。

彼らに石室形態の選択権まで委ねられていたのか否

か、集団の社会的位置や相互の関係性など、派生する問題は山積である。これについては、報告書の考察の枠を超えた話となるので、稿を改めて検討を重ねていきたいと思う。

(永井)

付記

報告原稿を一通りまとめ終わった平成19年11月、本古墳の調査を手伝ってくれた福田桂子さんの訃報に接した。享年25歳。早稲田大学大学院で須恵器を専門としていた彼女と、木の本3号墳の現場テントで出土したばかりの不思議な土師器甕を観察し、意見を交わした事が昨日の事ようである。

思えば平成17年の夏に市内藤沢公民館で行った土器作り教室の際、早稲田大学実験考古学サークル「巧の会」の一員としてボランティア参加したのを契機に深谷との縁が生まれ、以来何度か現場を手伝いに足を運んでくれた。19年4月からは横浜市役所への就職も決まり、社会人としても研究者としてもこれからという矢先、病に倒れ半年以上の闘病生活の末、彼女は旅立った。調査関係者一同、本書を彼女の霊前に捧げることで哀悼の意を表したい。



木の本3号墳にて（左側が福田さん）

註

(1) 銅釦を出土する横穴式石室を有する古墳としては、近隣では深谷市小前田9号墳（瀧瀬1986）、同黒田11号墳（塩野ほか1975）、熊谷市石原・坪井古墳群中の薬師堂古墳（熊谷市史編纂室1984）、三ヶ尻古墳群中のやねや塚古墳（三ヶ尻林4号墳・小久保ほか1983）、塩古墳群中の西原18号墳（江南町1995）等が知られ、小前田9号墳が6世紀前半代に遡るものの、他は6世紀末～7世紀初頭の円墳であり、時期や墳形に偏りがある。木の本3号墳もまた、こうした銅釦出土古墳と同列に考えて良いのなら、必然的に7世紀でも新しくない時期を想定する根拠にはなろう。但し追葬による可能性を含む事は言うまでもない。なお、時期的にはやや遡ると思われる深谷市四十塚古墳群出土品や熊谷市甲山

出土品（塩野2004）の鈴釦も含めれば、北武蔵の後期古墳において銅釦・鈴釦は普遍的な副葬品と考えて良さそうである。とはいえ墳丘規模や伴葬副葬品から見れば、銅釦出土古墳は各々の古墳群中では「主墳的存在」と考えられ、一定の階層を示していると理解されると共に、被葬者が女性である可能性や特定の職掌・出自も念頭におくべきかと思う。

(2) 木の本古墳群中でも楡山神社東方の社前遺跡周辺の一群（社前支群）は、近年発掘調査が進み、多数の古墳跡が発見されている。詳細は報告書の刊行を待つべきだが、出土埴輪の特徴や組成が5世紀末～6世紀前半の様相を示し、木の本10号墳（さきたま資料館1993）のような造り出し付き円墳を核に小規模な円墳が密集する群構成が見え始めており、将来的には大規模な古式群集墳として評価される可能性が高い。また類似の様相は古墳群東端の幡羅遺跡北方の一群（欠下台支群）にもあり、近年の調査によって5世紀代に遡る円墳が複数確認されている（青木・永井2006・知久2007）。つまり木の本古墳群築造の契機が、櫛挽台地北縁に累々と造られた古式群集墳であったと考えられるのである。なお6世紀末頃に至って横穴式石室を有する古墳（木の本1・2号墳が可能性高い）が出現するが、これらは古墳群中央の一群（木の本支群）や、実態は良く解らないものの古墳群西端の一群（城西支群）がこれに相当し、新式群集墳として先の社前・欠下台支群といった古式群集墳とは、やや立地を変えているようにも見える。以上の点はあくまで古墳から見た現象であり、造営主体と考えられる台地下に展開する集落遺跡との突き合わせが急務であろう。木の本古墳群とその周辺遺跡群は、地域開発と群集墳の関係が具体的に語れる、格好のフィールドに変貌する可能性を秘めている。

(3) 本墳の石室は、本墳が近世段階に屋敷地の一部に取り込まれた際、恐らく石抜きを主目的とした破壊を受けている。その際に採取されたと思われる多数の石材は、現在も居住者の居る屋敷地内の東端に集積してある。しかし事実関係について聞き取りした訳では無い為、憶測の域を出ないことはお断りしておく。

(4) 未報告であるが、調査担当の江南町教育委員会（当時）の森田安彦氏と駒沢大学酒井清治教授のご高配によって調査現地を見学させてもらった際に確認した。しかし類例としてはこれ以外には見いだせなかったため、1つの系統である可能性は指摘しうるが偶然の一致である可能性も否定できない。いずれにせよ類例の増加を待ちたい。

(5) 6世紀後半（MT85型式期）と推定される噴火を指し、Hr-IやFPと俗称されるもので、大きくは2回目の噴火に相当する。噴火の時期については、坂本和俊氏による検討を参考とした（坂本1996）。

(6) 未報告であるが、調査担当の伊勢崎市教育委員会須永泰一氏と勢藤力氏のご高配によって調査中の現地を見学させてもらった。なお石室関係の図は『群馬県の横穴式石室Ⅱ』に掲載されている（群馬県古墳時代研究会1999）。

(7) 塩野博氏は荒川中流域に分布する群集墳の横穴式石室を検討し、石室平面形態が概ね短冊型から胴張りへ変遷する事を指摘している。今回分析対象とする荒川扇状地タイプは、塩野が対象とした範囲を拡大解釈したもので、先行研究として参考とした部分も多い（塩野1992）。

(8) 北武蔵における埴輪樹立の終焉については諸説あるが、ここでは暫定的に6世紀末と考える。

(9) 荒川はかつて利根川に合流していた時期もあったようで、星川や忍川はその名残と考えられる。逆に利根川が荒川に流れ込んでいた可能性もある（塚田・中島1997など）。

参考文献（直接引用していない報告書は割愛させて頂いた）

- 青木克尚・永井智教2006『幡羅遺跡Ⅰ』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第75集 深谷市教育委員会
- 青木敬2005「後・集末期古墳の土木技術と横穴式石室―群集墳築造における畿内と東国―」『東国史論』第20号 群馬考古学研究会
- 秋池武2000「利根川流域における角閃石安山岩転石の分布と歴史的意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第21号 群馬県立歴史博物館
- 新井端・森田安彦2005『立野古墳群発掘調査報告書』江南町埋蔵文化財発掘調査報告書第14集 埼玉県大里郡江南町教育委員会
- 池上悟ほか2008『野原古墳群発掘調査報告書』立正大学考古学会
- 石塚三夫1997『中小前田Ⅱ遺跡(第4次・第5次)・小前田3号墳』寄居町遺跡調査会報告第14集 寄居町遺跡調査会
- 岩田広明ほか1994『樋ノ下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第135集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 尾崎喜左雄1966『横穴式古墳の研究』吉川弘文館
- 金井塚良一1976「北武蔵の古墳群と渡来系氏族吉士氏の動向」『北武蔵考古学資料図鑑』校倉書房
- 川本町1989『川本町史』通史編 川本町
- 草野潤平2008「埼玉県における切石積石室の地域相」『埼玉考古』43 埼玉考古学会
- 熊谷市史編纂室1984『熊谷市史』通史編 熊谷市
- 黒沢教夫1962「岡部村平塚古墳遺構調査報告」『あゆみ』第12号 埼玉県立深谷商業高等学校地歴研究部
- 群馬県古墳時代研究会1999『群馬県内の横穴式石室Ⅱ』（東毛編）群馬県古墳時代研究会
- 江南町1995『江南町史』資料編1 考古 江南町
- 門脇伸一ほか1994『酒巻21号墳(2次)・白山愛宕山古墳(1・2次)・白山2号墳』行田市埋蔵文化財発掘調査報告書第30集 行田市教育委員会
- 古池晋祿ほか1991『明戸南部遺跡群Ⅰ』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第29集 深谷市教育委員会
- 小久保徹ほか1983『三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 埼玉県1982『新編埼玉県史』資料編2 原始・古代 弥生・古墳 埼玉県
- 酒井清二1984『台耕地(Ⅱ)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- さきたま資料館1993「木の本10号墳」『古墳詳細分布調査概報』3 埼玉県教育委員会
- 坂本和俊1996「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帳』6 群馬県土器観会
- 坂本美夫1985「辻金具・雲珠考」『研究紀要』2 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 菅谷浩之ほか1991『万吉下原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告第18集 埼玉県教育委員会
- 知久裕昭2007「居立(2次)/森古古墳/下郷」深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第92集 深谷市教育委員会
- 鳥羽政之ほか2003『四十坂遺跡』岡部町遺跡調査会報告書第2集 岡部町遺跡調査会
- 瀧瀬芳之1986『小前田古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第58集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中広明1989「緑泥片岩を運んだ道―変容する在地首長層と労働者発権―」『土曜考古』第14号 土曜考古学研究会
- 塚田良道・中島洋一「真名板高山古墳の再検討」『行田市郷土博物館研究報告』第4集 行田市郷土博物館
- 利根川章彦1982『新ヶ谷戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第9集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 利根川章彦1987「やねや塚と新ヶ谷戸―7世紀の北武蔵における村落首長層に関する考古学的検討」埼玉県立博物館紀要13 埼玉県立博物館
- 塩野博1992「見目古墳群とその出土遺物」『埼玉考古』第19号 埼玉考古学会
- 塩野博1992「荒川中流域沿岸の古墳について―横穴式石室の変遷―」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 塩野博2004『埼玉の古墳』[大里] さきたま出版会
- 塩野博ほか1972『鹿島古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査報告第1集 埼玉県教育委員会
- 塩野博ほか1972『黒田古墳群』黒田古墳群発掘調査会
- 永井智教2005a「関東地方北西部における横穴式石室の地域性」『横穴式石室からみた濃尾の地域社会』勢濃尾研究会
- 永井智教2005b「第Ⅴ章 宮内古墳群の提起する問題」『杵戸谷遺跡』児玉町遺跡調査会報告書第19集 埼玉県児玉町遺跡調査会
- 長谷川勇ほか1978『埼玉県本庄市御手長山古墳発掘調査報告書』本庄市教育委員会
- 増田逸郎1977「まとめ」『塚本山古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査報告第10集 埼玉県教育委員会
- 増田逸郎1977「模様積石室小考」『調査研究報告』第9号 埼玉県立さきたま資料館
- 増田逸郎1989「埼玉県における横穴式石室の受容」『第10回三県シンポジウム 東日本における横穴式石室の受容』群馬県考古学研究所ほか
- 増田一裕1990『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅳ―御堂坂第2号墳の調査―』本庄市埋蔵文化財調査報告書第16集 本庄市教育委員会
- 松田哲2001「肥塚中島遺跡・出口上遺跡・肥塚古墳群14・15・16号墳」平成12年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 熊谷市教育委員会
- 松田哲2005『籠原裏古墳群』平成16年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 埼玉県熊谷市教育委員会
- 右島和夫1993「角閃石安山岩削石積石室の成立とその背景」『古文化談叢』第30集(下) 九州古文化研究会
- 村松篤2004『鹿島古墳群』川本町発掘調査報告書第10集 川本町遺跡調査会
- 村松篤2005『鹿島古墳群』川本町発掘調査報告書第11集 川本町遺跡調査会
- 森田安彦2006『上前原遺跡第2次発掘調査報告書』江南町埋蔵文化財発掘調査報告書第15集 埼玉県大里郡江南町教育委員会
- 若松良一1982「菖蒲天王山塚古墳の造営時期と被葬者の性格について」『土曜考古』第6号 土曜考古学研究